大学体育研究　32：35 − 39，2010

ワールドポート・トーナメント国際野球大会に参加して

川村　卓

はじめに

日本野球連盟は海外で行われる大会に数多く代表を編成して出場させているが，社会人代表を中心とした編成をここ10年ほどで大学生へと拡大させている。

筑波大学硬式野球部が所属する首都大学野球連盟にオランダ・ロッテルダムで行われる「ワールドポート・トーナメント」への参加依頼があり，連盟で編成したチームを日本代表とすることとなった。学生に国際大会の機会を与えることは単に強化の面だけではなく，様々な視野を広げる意味でも大変意義のあることである。この大会は公式な国際大会の一つと考えられており，同国のハーレム市で行われる「ハーレム・ベースボールウィーク」と隔年で開催されている。参加国は日本，アメリカ，キューバ，オランダ，台湾の5カ国であり，2回戦総当たりで優勝を決定する。ヨーロッパで野球の国際大会，特にヨーロッパ以外の国々が参加する大会は滅多になく，人口60万人ほどのロッテルダムにおいても非常に盛り上がると聞いていた。代表編成の中で，筆者もコーチとして，さらには筑波大からは4名の選手が選出されたことから，これらの大会の模様と活躍，世界の野球の現状を記していきたいと思う。

前半戦

2009年6月30日に成田を出発した日本代表は13時間のフライトの後，オランダ・スキポール空港に到着した。空港の外に出ると結構暑く，電光掲示板の温度計を見ると摂氏28度を示していた。後で聞くと，この時期にしては珍しいくらい暑いそうで，直射日光が非常にまぶしかった。けれども，カラッとした天気であり，梅雨のジメジメした気候から来た我々としては過ごし易く感じた。

その後，迎えに来ていたバスで移動し，ロッテルダムに到着した。滞在先の球場とホテルが200mぐらいの距離で，移動の負担がなかったのは幸いだった。1日練習をし，時差にも慣れてきたところで，7月2日からの試合を迎える。しかし，国際試合はすんなり行かないのが教訓で，前日の土壇場になってアメリカの不参加が伝えられた。よって，4チームの3試合総当たりで当初の予定より1試合多く，10日間で9試合という非常にタイトなスケジュールで行うことになった。日本チームは選手22名であるため，急遽，首脳陣で集まり，投手のローテーションと起用方法の練り直しを行った。

第１戦は台湾である。台湾の投手コーチは元西武の郭泰源さんであり，日本語も流ちょうであったため，試合前後に様々な意見交換を行った。台湾の編成は大学生と社会人，元プロの中で選出されており正代表も数名いたとのことだった。筑波大の山本洋平(4年)が３安打，塩澤佑太(3年)が逆転タイムリーを放つなどのいい面がみられたが，結局延長11回３－４で負けてしまった。バントなどの小技がうまくいかず，勝利への執着も足りなかった。初戦ということもあり，様子を見るような試合態度になってしまったのが敗因である。両国ともに硬さがみられた試合だったが，初戦を取って弾みをつけたかった。案の定，次の日のキューバ戦は地力の差もあって０－８で負けてしまった。学生の甘さが出ていることと，急造チームなためチームワークが取れないことが問題であった。

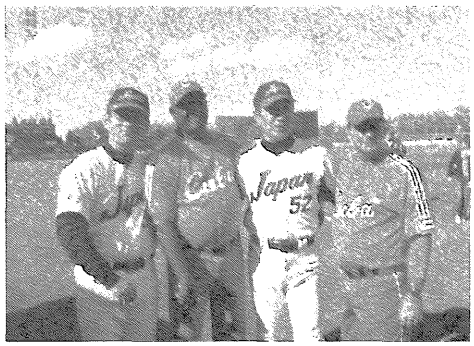
３日目は地元オランダとの対戦だった。オランダは正式な国の代表であり，国内リーグから選抜された力量のある選手がそろっていた。前回2002年に私がコーチとしてハーレム大会においてオランダと戦った時は，力はあるが非常に粗い印象だったが，テネシー大学の元監督であり，アメリカきっての理論家であるロッド・デルモニコがオランダ代表の監督に就任すると，この春のWBC・１次予選で強豪国のドミニカ共和国を２度も破るまで強くなった。今大会においてもデルモニコが監督を務め，侮れない相手である。

試合前になると観客が満員となり，これまで以上に高揚したが，その観客に動揺したか，試合前のシートノックでは学生のエラーが多く，ノックを打っていた筆者もさすがに怒りが込み上げてきた。前回の東都大学野球連盟の選抜チームが８戦全敗という記録だったことを事前に聞いていたので，このままでは二の舞になると感じた。試合開始直前，全員を集めて一喝した。「曲がりなりにも日の丸を背負ってきているのだから，プライドを持て。」普段は敵チームの学生でも，もう関係なかった。この喝がきいたわけではないだろうが，先取点をうまくとってから波に乗り，先発投手の好投もあって結局６－０で初勝利をすることができた。観客は日本が学生の代表であることは知っていた一方で，WBCで優勝した国であることも知っており，日本がどんな野球をするのかを注目していることを関係者から聞いていた。波に乗った次の日の台湾戦も６－１で勝利し，寄せ集めチームの結束も強くなってきた。しかし，このあたりから，学生の連戦による疲労と全員オランダ人による審判のジャッジの不公平さがあからさまに出てきた。特にオランダ戦はその傾向が強く，日本には非常に不利な判定が多かった。学生はこうした経験が少な

いため，不公平なジャッジに不満が募るだけとなり，切り替えが出来ずに自分たちのミスを誘発してしまうこととなった。このようなことは国際大会ならではだが，学生にとっては非常に良い経験となったはずだ。以後，オランダ戦は戦力的には日本が有利だったにもかかわらず，勝つことができなかった。

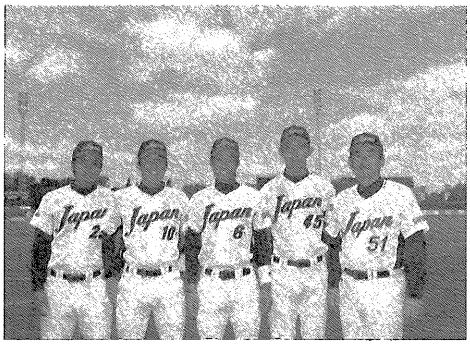
ロッテルダムの街と人

ここで，我々が滞在した街，ロッテルダムを紹介したいと思う。ロッテルダムはオランダ第2の都市であり，歴史を感じさせる首都・アムステルダムよりは，近代的な建物が目立つ。世界屈指の港湾都市でもあり，ヨーロッパの海の玄関として「ユーロポート」と言われている。滞在した2週間余りのうち，前半はとても暑かったが，後半は雨や寒い日が多く，厚手のものを着なくては過ごせないほどだった。また，この大会はロッテルダムの夏のお祭りという位置づけにもなっていて，非常に多くの人たちが集まっていたが，基本的にはあまり野球のことを理解している人は少なく，雰囲気を楽しんでいる様子だった。試合は基本的に1日2試合で午後2時から，もしくは午後7時からのプレイボールだった。特に夜の7時(でも昼のように明るい)からのゲームは，スポンサーズ・シートに仕事帰りのビジネスマンやその家族が集まり，食事を取りながら楽しむ風景が見られた。このように気軽な形でスポーツを観戦できるのがいい。地元の企業がスポンサーとなり，規模としては小さいながらも国際大会を運営する，ある種の「手軽さ」は私たちも見習うところが多いと感じた。これらを支えるのは多数の市民ボランティアである。グランドキーパーのおじさんと仲良くなって，色々と話しかけるとこの大会を迎えるのが楽しみだと話していた。そのおじさんも会社公認で仕事を休んできているとのことだった。



最強キューバ

後半戦に入ると日本チームは連戦の疲労のためか全くいいところがなく敗戦を重ねていた。最終日を待たずして，全勝のキューバが優勝を決めた。今回のキューバチームはいわゆる第二代表を連れてきていた。その中には，WBCの代表も5名ほどおり(ただ，主力投手の亡命があった)，チームとしての迫力は随所にみられた。若手とベテランの混成チームであるキューバは，ベテランは余裕ながらも待遇の良い第一代表への復帰を目指して，若手はなりふり構わず血眼になって監督にアピールをしていた。キューバチームは世界の大会で金属から木製バットが使われるようになってから，打線の迫力が以前より無くなったが，セフティバントやプッシュバント，エンドランといった小技をしっかりと行うものが増え，非常に緻密な野球をする印象を持った。特に守備面がしっかりしており，内外野ともに基本を守る姿勢が徹底され，派手なプレイではなく，確率の高いプレイが志向されていた。満塁での一塁けん制など，組織プレイもみられ，日本の野球のほうが粗く感じられた。投手力はどの投手も150km/hを超える速球を持ち、スピードがありながら変化の大きい球種を持っていた。



筆者は普段，打撃動作に着目して研究を行っているため，戦いながらもキューバチームの打撃に注目していた。一言でその特徴をいえば，ボールを引きつけてしっかり身体の前で打つという姿勢である。以前のキューバよりも今回来ていた打者は打席の中であまり動かないで，ボールを引きつけながらも，無駄のないスイングによって身体の前で，バットが最速になったあたりで打つというスタイルが多くみられた。この打ち方は動きがない分，長打が少し減るが，確実性は増す打撃であると直観した。打ち方自体はすぐにはまねできないかもしれないが，直ちにできることがあるとすれば，見逃し方であろう。打ちに行くことは間違いないが，きちっと崩れず，トップの姿勢を作ることは日本の打者にも参考となる部分であった。

最終戦の金星

日本チームは2勝6敗で最終戦のキューバを迎えた。首脳陣も前日のミーティングで前代表が全敗だからよしとする向きもあるが，最後だから王者キューバにひと泡好かせようと結束して試合に臨んだ。結果から言えば，2－1で大金星を得ることができた。この勝利には久々に興奮を覚えた。日本の学生がキューバに勝利することができた。キューバはどんな相手でも，順位が決まっていようとなかろうと，負けなかった。WBC以前に日本のアマチュアがキューバに勝ったのはおそらく，10年以上なかったと記憶している。ここで大きく力の差があったのに日本チームが勝利できた要因について考えてみたい。

一つ目はゲームプランである。この試合は勝つのであれば，2－1と予想し，実際行うことができた。実現可能なプランを立てたことが選手にコミットしやすい目標となった。

二つ目は投手の好投である。コントロールを大切にし，ピンチでもむきにならなかった。外国のボールは滑りやすく，対応するのが大変だが，きちっとコントロールできたのが何よりも大きかった。

三つ目は先制したことが大きく，その後も攻め続けたことである。走者をよく出し，盗塁，バスター，ダブルスチールと成功するか否かは別として，終始攻め続けたことで相手に主導権を渡さなかった。

四つ目は最終回に先頭を出さなかったことである。1点差で勝っているときに先頭を出すことは守備全体の焦りに繋がる。キューバも後半は焦りからかフライが目立った。人間誰しも心理的に追い詰められることを当たり前だが再確認した。

日本の課題―終わりに代えて―

結局，日本チームの成績は3勝6敗で全体の最下位であった。しかし，正式な代表クラスを含んだ他国に比べ，学生のみで構成したチームとしては評価できると思う。日本の野球はWBCでの2度の優勝から，注目を集めていたのは確実であった。その期待に応えたか否かは定かではないが，キューバから1勝できたのは日本しかなく，その存在を示せたと思う。一方，優勝したキューバはプロが加わった最近の大会ではアメリカ，日本に勝てずにいるため，チームスタイルを変えつつある。コンパクトな

振りの鋭い打撃，身体の恵まれた投手の直球と変化球，そして，堅実な守備力は崩すことが難しいと感じた。ただ，投球のほうでは変化量は大きいが鋭さがないため，慣れれば対応はできそうに感じた。また，どの投手も同じようなきれいな投げ方であり，この点もキューバの弱点になるのではないかと感じた。

台湾は若手で将来性豊かな可能性を感じる選手が数名いた。今後，強化をいかに行うかが楽しみであった。オランダも確実に力をつけつつある。特に投手は恵まれた体格から，球の出所が見づらい投球をしていた。これはあまり投球のフォーム指導がなされていないせいかもしれないが，独特のリリース位置から投げられることで，日本にはかえって対応困難なピッチングになっていた。

日本は国際大会になると常に打撃向上をいかに図るかが課題と言われている。日本の打撃は対応という点では優れているが，パワー不足は否めない。接戦に持ち込めば試合巧者である日本は非常に優位な戦い方ができるが，野球はホームランがでれば大量得点が見込まれるため，一つ間違えば，修復不能になる恐れがいつもある。そのためにはホームランを含めた長打で応酬できるようにしなければならない。そのためにも引きつけつつ身体の前で打てるようなスイングを身につける必要があり，そのことを筆者も肌で感じられたことが何よりも収穫であった。

筑波大学の学生は主力として活躍した。特に塩澤，山本は全試合に出場し，メジャーリーグのスカウトも絶賛するほどだった。柄目友久 (4 年) は実質チームのまとめ役として，堀江元 (2 年) は中継ぎ投手として活躍した。以前オランダへ来た時は，筑波大のメンバーは前面に出ることはできなかったが，今回は本当の意味でチームの中心であった。

最後になるが，滞在中は在蘭邦人の方々にお世話になった。特にマネージャー兼通訳のハミさんにはかなりの部分で頼ってしまった。ここに記して感謝を申し上げたい。